

恋愛の心理

～人生は恋だ～

tsuguyuu

1年生

二〇〇九年春、彼女の名前が珍しいなと思っただけだった。

その頃、特に好きな人もなく部活だけに集中していた。

ところが、夏。たぶん休みの日だった。なぜか彼女のことを考えていた。初めての気持ちだった。

体育祭の団は違ったが、少しでも共通点を持ちたくて応援リーダーになった。特に話もしなかったが、その時はそれで十分だった…

そして、秋。家庭科の授業の後初めて話した。最初、「卓也」と呼んでくれたが、少し照れて「山崎」と呼ばれたことを覚えている。あの時「卓也って呼んで」と言う勇気があれば…。今でも後悔している。

でも、その時はそれだけで嬉しくて、ずっとテンションが上がっていた。嫌いな部活も、その日は楽しく思えた。

そうして、冬になり生徒会選挙の時期になった。彼女はたぶん立候補するだろうと思い、私も出馬した。

そして、他の男子と二人、当選してしまった。本当は彼女と一緒にしたかったが、その時は当選しただけでも嬉しかったし、内気な性格をどうにかしたかったので、「がんばろう」と思っていた。

冬場は、よく彼女と一緒に帰っていた。二人っきりではなかったし、話も特にしなかったと思う。しかし、一緒の空間に居られるだけで幸せだった。

三学期の理科の時間の^{たび}度に、よくちょっかいを出していた。休み時間に筆箱をテープで机にくっつけたりもした…。私の後ろに彼女がいて、たまに椅子を蹴られていた。

2年生

二年生になると、なかなか話せず毎日苦しんでいた。

ただ、グループで昼休みにプロ野球の応援歌を歌っていたときに、笑ってくれた。嬉しかったことを覚えている。

その頃は、これが恋だと分かっていた。しかし、友達にも言わなかった。

体育祭は一緒にの団になり、応援リーダーも一緒にした。それでも、なかなか話さなかった。

もっと勇気があればよかった……。

二回目の冬が来て、生徒会長選挙。私はもちろん生徒会長になりたかったし、自信もあった。ただ、それよりも彼女が生徒会に入るのだろうか？そればかり考えていた。

結果は私が生徒会長、彼女は生徒会のこうほう広報という形になった。とても嬉しかった。これで一年間は接点が出来たのだから…。

東日本大震災の募金活動が、初めての大きな仕事となった。確かに話す機会は増えたのだが、それも仕事の内容ばかり…。活動の帰り、話したくて待って一緒に帰ったが、彼女の友人としか話すことが出来なかった。

他の子と話すのと必要な勇気が違うのだ。

なかなか自分から話しかけられない。やっぱり苦しかった。

そのような中でも、具合が悪かった日の昼休みに、彼女が「大丈夫？」と言って、肩を叩いてくれた。とても嬉しかった。

中体連も最後まで賞を取ってイイところ見せたかったが…。そんなに甘くないことは分かっていた。二年生の春から、毎朝グラウンドを走っていたが、剣道に関する努力はしていなかったのが仕方ない。ただ、毎朝走るエネルギーをくれたのも彼女だった。

最後の体育祭。一緒に団で応援リーダーをした。生徒会長は団長を出来ないのに、彼女は会議の時に私を推薦してくれた。議長は私がしていたので「ごめんけど出来ません」と言ったが、内心はやりたかった。彼女は副団長をすと思っていたから…。

しかし、その考えは間違えていた。彼女は副団長に立候補していたのに、あっさり諦めて応援リーダーになった。その時の彼女の心境は分からないが、もし私が団長をしていたらどうだったのだろうと考えてしまう。

団では二人だけ二年間応援リーダーをしていたので、団長のサポートを積極的に二人で行った。

本当に一年生のときから応援リーダーをしていてよかったと思う。結構きつかったのですが、尚更だ。

体育祭終了後、体育の先生に推薦され、駅伝部の男子キャプテンに任命された。そして、驚くことに女子キャプテンが彼女だった。彼女は二年生のころからメンバーに選ばれていたのが納得できるが、私が選ばれるとは思わなかった。

決して足は速くないし、運動音痴…。ただ、毎日走っていたことでアピールできたのだと思う。体育の先生は剣道部の顧問の先生でもあったので、本当に運が良かったと思う。

走ることは大好きだったので、自主練も積極的に行った。

ある日、私が一時間ほど自主練に地元のマラソンコースを走りに行った帰り、教室に向かう廊下で彼女がいた。彼女も自主練をしていたのだと思うが、一時間もしてはいなかったと思う。いつも早く帰っていたからだ。あとで友達に聞くと、私を待っていてくれたのだと言っていたが、冗談だと思う。

「チャンス！」と思い「今度のキャプテンの挨拶、一緒に考えよう」と言って教室で話していた。実際、そんなこと考える気もなかった。

三〇分くらい、何を話したのか覚えていないが、玄関に行くと生徒は誰もいなかった。そして体育の先生と教頭先生と会ってしまった。普通なら「早く帰りなさい」と注意されるのだが、彼女が二人の先生と仲が良かったため、先生方とも一〇分近く話した。その後、私は自転車で来ていたのだが、思い切って「一緒に帰ろ」と言って一緒に帰った。たぶん初めて二人っきりで帰って話しただろう。

土、日の練習後も自主練をしていたが、その後も一緒に帰った。私の思い違いだと思うが、彼女の友達も一緒に居たのに彼女は一緒に帰るところか、友達が帰るまで待っていたような気がする。

帰りは遠回りで帰っているいろんな話をしたと思う。内容は覚えていない。

内心、結構いい関係になってきたと思っていた私は、彼女をバルーンフェスタに誘った。すぐにOKをもらえた。嬉しかった。…が、それが地獄の始まりだった。

何故かまわりの同級生も知っていたし、冷やかされた。

そして気まずくなって、三週間近く話さなくなった。それどころか拒まれていたと思う。

結局、彼女は唐津くんちに友達と行くことになった。別に私はバルーンフェスタに行きたかったのではなく、彼女と一緒にならどこでもよかったのだが…。当時はそんなことを言える雰囲気ではなかったし、勇気もなかった。

どんどん気まずくなって追い詰められてしまった。

その時、彼女は鹿児島県の鳳王学園に行くと言っていたので、焦りもあった。

そして、二〇一一年、一二月十四日に私は告白した。OKなんてもらえるはずもない。このときに私の運命は確実に悪い方向へと向かったのだと思う。

次の日、断られた。貸していた本も返された。

たぶん、冬休み中落ち込んで泣いた。

学級委員を二人でしていたので、どんどん気まずくなる一方…。担任の先生にももしかしたら勘づかれていたと思う。

結局、最後まで気まずいまま卒業式。

アルバムにコメントをもらいたかったが無理だった……。

このまま終わりたくないと思い、春休みに家に電話して呼び出した。オーダーで箸を作り、ラブレターとともに渡した。

そして、最高の中学校生活は幕を閉じた。

毎日、彼女のことばかり考えていた。彼女と接点を持つためだけに、応援リーダーや生徒会にはいり、まさか生徒会長になるとは思ってもいなかった。

本当に感謝している。楽しい思い出が出来たのも彼女の存在のおかげだし、ふられた経験も私を強くしてくれている。

逆に、私は彼女に何もしてあげることが出来なかった。

自分の意見ばかり言って、我慢もできず…。

もし、私がなにもしないことが、彼女の願いならば…。私は諦めなければならないのか…？それを考えると、胸が苦しくなる。

感謝しているし、迷惑をかけていることは分かっている。だから、何かしてあげたいと思う。その「何か」が、私がもう彼女と接しないことならば…。私はどうすればよいのだろうか…。

恋愛は難しい。

ただ、想いを正直に伝えることが私は大切だと思う。

恋愛の心理は誰にもわからない。

嫌いだった人が、ちょっとしたきっかけで好きになることだってある。

人の恋は終わらない。

恋愛の心理

<http://p.booklog.jp/book/105221>

著者 : tsuguyuu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tsuguyuu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105221>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105221>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ